

EBN (Evidence-Based Nursings) を考える

草間 朋子 Tomoko Kusama, RN, PhD

大分県立看護科学大学 広域看護学講座 保健管理学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2003年1月14日投稿, 2003年2月24日受理

キーワード

根拠に基づく看護、看護、資源、無作為化試験、臨床経験

Key words

EBN, nursing, resource, RCTs, clinical practice

1. はじめに

医療の領域でEvidence-Based Medicineの重要性が強調されるようになり、看護界においてもEvidence-Based Nursing (EBN) あるいはEvidence-Based Practice (EBP) の重要性が認識され、1998年からは、British Medical Journal社からは、雑誌「Evidence-Based Nursing」も発刊されている。しかし、研究論文としての基準をクリアしてこの雑誌に収録されている論文の多くは医学関係のもので、看護に関する論文はまだ数少ない。

患者個人の医療情報は患者本人に帰属するとの考え方が主流を占め、要求された医療情報は患者あるいは患者家族に開示する方向で検討が進められている。また、インフォームドコンセントを得ることが不可欠となり、看護職にも医療の一員としてのアカウントビリティも要求される時代となった。医療をとりまく環境の変化に対応したケアを提供していくためには、従来の、主に経験に基づいた看護から、エビデンスにもとづいた看護を提供していかなければならない。医療の領域にもようやく透明性、公開性を求める時代の進化の波が押し寄せていることを実感する。

このような状況の中で、ケアの質を確保し、看護の専門性および看護学を確立していくためには、いつでも、どこでも、誰でもが活用できる科学的に立証されたケアを形として残し、それを使っていく努力が、看護職に求められている。

2. EBNとは

EBN (エビデンスに基づく看護) は、患者さんに対して最善のケアを提供するための手段であり、看護の熟練者の経験と知識に基づいて行われてきた従来のケアに代わり、現時点で得られる最善の科学的なエビデンス(根拠)を活用して個々の患者さんにとって最善のケアを提供していこうとするものである。

EBN、すなわち患者さんにとって最善のケアは、図1に示す「エビデンス」「患者の意向」「臨床経験」「資源」の4つの要素を総合的に判断して決定される(Dicenso et al., 1998)。EBNという名称からエビデンスが最優先するような印象を持たれてしまう場合もあるが、どんなにエビデンスが高いケアであっても、患者さん、あるいは、患者さんの家族などに受け入れられなければ提供することはできない。看護においては患者さんの個別性を重視することが大前提である。また、費用効果関係などによる効率や、実施にあたって活用できる資源等も考慮に入れながら提供できるケアを決めなければならない。

臨床現場では、EBNは次に示すステップを経て判断、実行される。

- (1) 問題の定式化：看護実践における問題、疑問点を明確にする
- (2) エビデンスを探す：文献調査によりエビデンスとなり得る情報を探す

- (3) エビデンスを批判的に検討する：文献で探した情報がエビデンスとして活用できるものであるかどうかを評価する
- (4) 患者への適応：エビデンスを、患者さんに適用できるかどうかを「専門的な知識」「患者さん等の意向」「利用できる資源」を考慮して判断する
- (5) アウトカムを評価：エビデンスを適用した結果を評価し、フィードバックを図る。看護職は、EBN に関しては、エビデンスを評価して使う、すなわち公表されている看護研究の結果を積極的に利用する立場にあると同時に、エビデンスを精力的に作りそれを公表する、すなわち実際に看護研究を行う立場にもある。

3. エビデンスの利用 - エビデンスにもとづいた看護を提供する -

EBNを進めていくためには、臨地現場で個々の看護職が、ケアのレベルアップを目指して常に問題意識を持つこと、どのようなエビデンスが公表されているかをサーベイする関心と能力を身につけること、および、エビデンスを利用しやすい環境を整えること等が必要である。

臨地現場で、疑問を感じたときにはそれを整理し、問題点が何であるかを明確にし、問題解決に関連したエビデンスを示した文献などを探す。文献は、インターネットやCD-ROMを使って検索される。看護に関連した文献検索システムの主なものを表1に示す。文献検索にあたっては、整理した問題点を言語化し、適切なKey Wordsを、適切な数だけ選択することが重要である。Key Wordsによって検索されたエビデンスの質(研究として妥当なものであるかどうか)を評価し、問題解決のために利用できるかどうかを判断し、そのエビデンスを実際の活用に移すことになる。

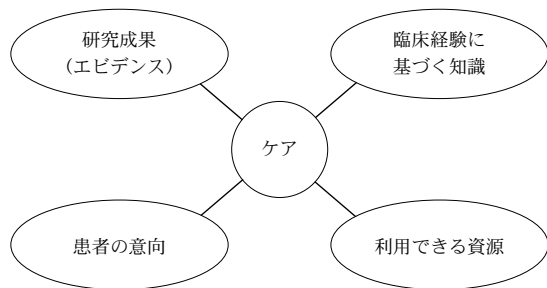


図1. EBN: 最善のケアの判断 (エビデンスに基づく意思決定モデル)

米国AHCPR (Agency for Health Care and Policy and Research) によって表2に示すエビデンスの質の評価の分類例が示されており (US Department of Health and Human Services, 1993)、これが国際的にも広く活用されている。表2に示した[I a]に該当するものがもっともエビデンスの高い研究であるとされている。

EBNは、図1に示したように患者にとって最良のケアを提供するための一連の行為であるにも拘わらず、エビデンス・研究成果のみが着目され、しかも、研究成果の中でも大規模な臨床試験の結果のみが重視される傾向にある。しかし、看護は、治療を目的とした医療とは異なり、患者さんと看護職との相互関係で成り立っており、エビデンスとしての質の高いとされている無作為化試験 (Randomized Controlled Trials) を臨地現場で実施することは難しい。何故なら、ケアの現場で患者さんをランダムに群別(介入群と非介入群とを無作為に分ける)することが難しいうえに、研究目的としているケアのみを単独で実施することは難しいからである。また、ケアを提供する看護職の個性など、研究結果に影響を与える全ての条件をコントロールすることもできないからである。したがって、研究手法にこだわらずに、現在、直面している問題解決に役立つエビデンスであるかどうかを状況に応じて客観的に判断できる姿勢が必要とされる。

4. エビデンスの作成 - 看護研究を実施する -

EBNの重要性が強調される一方で、活用しようとする看護に関するエビデンスが十分集積されていないのが現状である。看護の現場には、数多くの問題が山積みしているにも拘わらず、日常のケアに追われ問題意識を持ち、その解決に向けての研究等を行う時間的な余裕がなかったことも看護研究の成果、すなわちエビデンスが少ない原因の一つでもある。しかし、看

表1 主な文献検索システム

PubMed/MEDLINE
CINAHL
EBN
最新看護索引
医学中央雑誌

I a:	複数のランダム化試験のメタアナリシス
I b:	ランダム化比較試験
II a:	よくデザインされた非ランダム化試験
II b:	他のタイプのよくデザインされた準実験的研究
III:	比較研究、相関研究、症例対象研究などよくデザインされた非実験的記述的研究
IV:	専門家委員会の報告や意見、あるいは権威者の臨床経験

表2 エビデンスの質の分類 (米国 AHCPR の分類)

護の質の向上を図り、専門性の高い看護を提供していくためには科学的なエビデンスの積み重ねが必要である。

看護研究のテーマとしては、(i) ケアの改善のための研究、(ii) 看護サービスの提供方法に関する研究、(iii) 看護システムに関する研究、(iv) 看護教育に関する研究などさまざまなものがある。

看護研究は次の手順で進められる。

- (1) 問題点を明らかにする。
- (2) 関連する先行研究を調べ、解決に向けての研究範囲、研究テーマを明確にする。
- (3) 仮説 (仮の解決策) を立てる。
- (4) 研究方法等研究計画を立案する。
- (5) 仮説を評価するためのデータを収集する。
- (6) データの分析と評価を行う
- (7) 研究結果を論文としてまとめ発表する。

看護研究のテーマの選択に当たっては、問題点を明確にし、焦点を絞った研究を行うことが重要である。大き過ぎるテーマの下で行われた研究からは、問題解決に結びつくような新たなエビデンスを生むことはできない。

研究方法としては、実験的 (介入) 研究、記述的・分析的研究などがあり、データの収集方法には、計測・測定、面接調査、質問紙調査、観察などがあるが、目的にあった研究方法、データ収集法を選択しなければならない。

看護研究は、患者さんに直接または間接的に役立つものでなければならない。臨地現場には、解決を要する問題が山積しており、看護研究のテーマがたくさんある。しかし、看護の関連雑誌に報告されている看護研究は、大学などの教育機関から報告されたものが多く、実態調査に関するものが多いのが現状である (大橋 他, 2001)。

患者さんに直接、間接的に還元されるエビデンスを提供できるように臨床の現場等で、疑問に思ったこ

と、改善しようと思ったことなどを科学的に検討し、結果を出し、それを公表する一連の看護研究を積極的に実施していくことが看護の質の確保にとって不可欠であることを看護職が認識する姿勢が必要である。

看護研究を実施するにあたっては、対象者の研究への協力の同意 (インフォームドコンセント) と、プライバシーの確保など倫理的な配慮を忘れては

ならない。

5. おわりに

医療の領域では、熟練者の経験から得た事実と知識に基づいて行われてきたさまざまな行為が科学的に妥当であるかどうかの見直しが行われている。看護に関する事項については、看護の関係者がこれを行っていかなければならない。

多くの場所で、多くの看護職によって実際に活用されるエビデンスをつくっていかなければならない。看護の領域では、心理学や社会学などの他の領域で得られた結果を、看護の領域で適用できるか否かの検討が十分に行われないうままに借用してきた傾向を否定できない。EBNを進めるためには、まず、アウトカムとして何に着目し、それをどのように客観的に評価していくかについて明確にしていなければならない。看護の領域で使える画一化した効果判定の尺度、スケール化の開発が早急に必要であろう。ヒトの生理、生化学的な尺度を看護研究の中にもっと積極的に利用していくことも望まれる。

最近では、オーダーメイド医療あるいはテーラーメイド医療の必要性がいわれ、患者の個別性を尊重した医療が重視されつつある。患者さんの人としての側面に目を向けた看護においては、常に患者さんの個性を重視したケアが提供されてきたが、エビデンスを作りそれを積極的に取り入れることによって、さらに質の高い充実した看護が提供できることが期待される。

参考文献

- Dicenso, A., Cullum, N., Ciliska, D. (1998). Implementing evidence-based nursing: Some misconceptions/ Evidence-Based Nursing, 1, 8.

大橋晴雄、数間恵子、宮下光令 (2001). 日本の看護研究と Evidence-Based Nursing. *Quality Nursing*, 7, 828.

US Department of Health and Human Services. (1993). Agency for Health Care and Policy and Research; Clinical Practice Guideline No.1, Acute pain management, operation or medical procedures and trauma. Rockville: AHCRP Publication.

著者連絡先

〒 870-1201
大分県野津原町廻栖野 2944-9
大分県立看護科学大学 保健管理学研究室
草間 朋子
kusama@oita-nhs.ac.jp